令和８年度プロジェクト研究
「日本の子供・教師のウェルビーイングを高める学校革新に関する研究」中間報告書

「教員のウェルビーイングに関する実態調査 第１波の結果（中間報告）」概要について

プロジェクト研究「日本の子供・教師のウェルビーイングを高める学校革新に関する研究」では、教員のウェルビーイングの測定及び実態把握を行うとともに、そうした実態が生じる要因について分析し、教員のウェルビーイングの実現を支える条件や環境の改善に資する知見を得ることを目指している。そこで、教員の働き方や勤務意識からウェルビーイングを捉え、同一の教員についてその変化を３時点で把握するため、三つの政令指定都市（A 市、B 市、C 市）の公立小中学校における学校管理職及び一般教員を対象としたパネル調査（それぞれ順に「学校管理職の働き方とウェルビーイングに関する実態調査」「教員の働き方とウェルビーイングに関する実態調査」であり、以下では「「管理職調査」「教員調査」とする）の実施を計画した。第１波調査は年度初めの 2026 年６月に実施した。今後の第２波調査（2027 年２月予定）は年度末における働き方や勤務意識の変化（学校環境や地域との関係等の影響）を把握することを、第３波調査（2027 年６月予定）は異動経験の有無が働き方や勤務意識に与える影響を明らかにすることを目的とする。この研究の端緒として、本報告書は、管理職調査と教員調査の第 1 波の結果について速報的に報告するものである。これを基に、教員のウェルビーイングを追求する教育政策の立案において検討する意義のある論点を提示する。

本研究は、教員のウェルビーイングについて、OECD の「ティーチング・コンパス」を参考に、身体的ウェルビーイング、認知的ウェルビーイング、社会的・情緒的ウェルビーイングの三つの次元で捉える。身体的ウェルビーイングは、教員を過度なストレスから解放し、教育活動により多くのエネルギーを向けられるようにするための基盤である。この構成要素として労働時間、睡眠時間、ワーク・ライフ・バランスの状況に焦点を当て、さらに、それらに影響され得る心理的・主観的側面として、心理的ストレス、仕事満足、離職意向について確認する。認知的ウェルビーイングとは、教育の仕事に伴う知的な営みに集中して取り組み、それを肯定的に捉えられる、認知的・精神的に良好な状態のことである。その構成要素として知的エンゲージメント、成長実感、自己効力感に着目する。社会的・情緒的ウェルビーイングとは、他者と信頼や協働に基づく関係を築き、その関係を肯定的に捉えつつ、自分自身の価値を認められる、社会的・情緒的に良好な状態のことである。その構成要素として、学校の風土（心理的安全性等、信頼や協働に関連するもの）、児童生徒との関係、保護者・地域との信頼、協調的幸福感に着目する。

本報告書では、公立小中学校教員の身体的ウェルビーイング、認知的ウェルビーイング、社会的・情緒的ウェルビーイングのそれぞれについて、調査対象の自治体ごとに小学校と中学校に分け、教員の性別と年齢層、学校規模の別にどのような差異やばらつきがあるかについてクロス集計等を基に検討した結果を報告する。また、各次元のウェルビーイングについて、学校管理職と一般教員を比較した結果を報告する。結果の概要は以下のとおりである。

教員の身体的ウェルビーイング（第２章）

身体的ウェルビーイングについて基礎的な分析を行った結果、性別では、女性教員の方が私生活

の時間を確保しにくく、離職を意識する傾向が見られた。学校種別では、長時間勤務の割合が小学校では 40 代以降に再び高まるのに対して、中学校では 40 代以降はおおむね低下する傾向が見られた。また、私生活の時間を確保できていない割合は、小学校では 40 代を中心にして高くなっているのに対し、中学校では 20～40 代の幅広い層で高くなっていた。さらに、心理的ストレスが高い教員ほど離職を意識する傾向が 3 市に共通して見られ、両者の間に一貫した関連が確認された。

教員の認知的ウェルビーイング（第３章）

認知的ウェルビーイングに関連する項目については、全体として肯定的な回答が多かった。しかし、小学校では知的エンゲージメント、成長実感、授業・学級経営・学校運営における自己効力感についての肯定的な回答割合が男性教員よりも女性教員で低く、中学校でも成長実感と自己効力感に同様の傾向があった。また、小学校と中学校ともに、教員としての成長実感や学校改善への自己効力感についての回答が年齢層によって異なる傾向も見られた。女性教員や 50 代の教員の認知的ウェルビーイングの実現を難しくしている背景や要因について、今後さらに検討する必要がある。

教員の社会的・情緒的ウェルビーイング（第４章）

社会的・情緒的ウェルビーイングに関連する指標は全体として肯定的な回答が多く、特に小学校教員や小規模校で勤務する教員は複数の指標で肯定的な回答割合が高かった。一方、女性教員や 30 代の教員では学校風土（心理的安全性や相互支援等）の面で肯定的な回答割合が低く、中学校教員でも複数の項目で相対的に低い傾向にあった。そのため、社会的・情緒的ウェルビーイングの向上に向けて、これらの教員への支援が必要であることが示唆された。

学校管理職と一般教員の比較（第５章）

3 次元のウェルビーイングや働き方への意識に関する質問項目・指標を学校管理職と一般教員とで比較した結果、どちらか一方が一貫して高いのではなく、ウェルビーイングの側面によって異なる傾向が見られた。特に、学校風土や協調的幸福感では、学校管理職が一般教員よりも肯定的に捉える傾向が見られた。また、職名群別に比較するとそれぞれ異なる傾向が見られ、副校長・教頭では勤務時間や仕事による幸福感、時間配分の自律感など、主幹教諭・指導教諭では業務時間、教諭ではストレスや時間配分の自律感、講師では仕事満足度、養護教諭・栄養教諭では心理的安全性や居場所感などの側面で課題が見られた。以上から、ウェルビーイング向上に向けて、勤務時間だけではなく、その状況を多面的に把握し、立場や職名に応じた対応を検討する必要性が示唆された。

各次元のウェルビーイングに関する項目への肯定的回答の割合が相対的に低いグループでウェルビーイングの実現に課題が生じている可能性があると考えると、第 2 章から第 5 章までの知見を総括した際、特定のグループのみに課題が集中しているわけではないことがうかがえた。その一方で、いくつかの傾向も見られた。まず、小学校教員と比べて中学校教員では、社会的・情緒的ウェルビーイングを中心に課題が示唆された。また、男性教員と比べて女性教員では、身体的ウェルビーイング、認知的ウェルビーイング、社会的・情緒的ウェルビーイングで幅広く課題が示唆された。さらに、職種間比較を通じて、副校長・教頭は、勤務時間や時間配分に関する自律感に課題が見られ

た。年齢層については、特定の年齢層が一貫して低調な状態にあるというより、年齢層によって異なる種類の課題が生じている可能性が見えてきた。

もっとも、以上の示唆をより確かなものとする上で、本報告書では十分に検討できなかった点も残されている。まず、本研究で測定を試みたウェルビーイングについては全体として肯定的な回答が多かった。この結果が実際のウェルビーイングの実現状況とどの程度対応しているのかについては、今後さらに多角的な検討が必要である。また、ウェルビーイングの実現が困難になっている可能性があり、支援の必要性が示唆されるグループについても、その背景や要因を明らかにし、必要な支援の在り方を検討するためには、さらなる研究の蓄積が求められる。さらに、本報告書では複数のウェルビーイング次元相互の関連性について検討できていない。各次元の間に相互的あるいは一方向の因果関係が存在するかどうかについても、第１波調査の結果のみからは明らかにすることができない。この点については、今後複数時点のデータを用いた分析によって検討を進める必要がある。